魔輪舞曲（マロンド）

みかど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔輪舞曲
マクロン

【コード】

N3088L

【作者名】

みかど

【あらすじ】

最強最悪の魔王が居た。

誰にも縛られず、誰をも従えず、孤高の魔王。

そんな魔王の隣に、いつからか並び立つ者が居た。

序

日が昇り、一日が始まる。

日が落ちて、一日が終わる。

夜の帳は魔界の始まり。

決して出歩いてはいけない。

魔に囚われる。

恐ろしい魔王が浚いにやって来る。

眼を閉じ、耳を閉じ。声を聞いてはならない。

その声は優しく惑わし、その姿は艶やかに誘う。

決してその手を取ってはならない。

それは人の『死』を意味するのだから。

「魔の時までには戻りなさい」

親の言葉に子供たちは神妙に頷く。

だが、その闇が本当に恐ろしいものであるか知る者は無い。

知って、戻ってきた者は無い。

2 従者

魔王の中の魔王。

その力は果てしなく、紫眼の視線だけで命を奪い、爪弾くだけで大陸を消した。

何者にも縛られず。何者をも従えず。

ただ我が道を行く孤高の王。

だが、いつからかその隣に立つ者が居た。

金の髪の美しい人。

孤高の魔王の隣で朗らかに笑い、冷徹なる魔王も隣人にだけは微笑みかけた。

「*****！」

形の良い唇は魔王の名を紡ぐ。

それに応えるように魔王は、その唇を塞いだ。

+++++

「んぐっ」

「はい、起きてください！」

唇に当たる感触…それは柔らかくぶるぶるとして…間違いな
く…

「ドラグンケログの目玉を食べさせるな！！」

ぺっ！と吐き出されたそれが床にころころと転がっていく。

人の拳大のゼラチン状の中に赤黒い何かが揺らいている。

女性なら悲鳴を上げて飛びのく気持ち悪さだ。

「ああ、珍味をもつたいない…」

しかし寝台の傍らに立つ少年は、それを未練がましく目で追った。

「だったらお前が喰え！拾って食べる、許す」

「別にいいです。遠慮しておきます。おはようございます。魔王様」

あっさりと断り、少年は不機嫌そうな魔王に頭を下げた。

「リク、貴様…死にたいのか？」

「特に死に急いでいるわけではありませんが…所詮この身は卑小なる人の身。魔王様の気紛れで生かされている身ですから。殺されても文句は申し上げられません」

口減らしに森に捨てられていたのを魔王が拾った。

それは確かに気紛れ以外の何ものでも無かった。拾ったからと言

って何か面倒を見たわけでも、食料を与えたわけでもない。
だが幼い子供はしぶとく生きて、魔王の『従者』と自称するまで
に育った。

「くそつ。せつかく久しぶりに我が愛しのシユザに出会えたという
に」

「夢ですけどね」

従者は辛辣だった。

「それよりさつさと起きていただけますか。魔界に日が差す時間は
短いので、寝具を干しておきたいのです」

「放っておけ」

「万年床はカビの温床です。カビと仲良しの魔王なんて格好がつき
ません。カビ魔王なんて呼ばれたら指差されて笑われるだけですよ。
せつかくの美貌も笑いの添え物になるだけです」

「貴様は……もういい」

反論するのも馬鹿らしくなり、魔王は寝台から出ると漆黒のマン
トを身に纏った。

「あ、そのマントも洗濯に……」

「黙れ。それ以上言えば灰にするぞ」

「はい」

「……。……」

魔王は蟀谷を押さえ、その場から消えた。

<従者>の名は『リク』それ以上も以下も無い。

そして、魔王によって与えられた役職でもない。ただリクがそ
う名乗っているだけだ。

魔王の身の回りを整え、城を掃除し、魔王を送り出し、魔王を迎
える。

何しろリク以外の人手というものがここには無い。

孤高の魔王はただ一人の部下も持たない。

部下が居る必要が無い。それほどに強大な力が魔王にはある。そして不要で余計なものを傍に置くほど魔王は慈悲深く無く、己を主と呼ぼうとした魔を瞬殺した。

その帰り道で気紛れに拾われたのがリクだった。

リクに掴まれたマントを振りほどくでもなく、歩調を緩めるでも無く、引きずるままに城に戻った。

そして、棲み付いたというわけだ。

魔王が気に留めるものは、今も昔もそして未来もただ一つだけ。

儂く散った麗しの恋人だけだ。

3 恋人

魔王様の日課は遠い過去に失ってしまった恋人の転生体を探すことだ。

孤高の魔王にとってその恋人が唯一気にかける存在だった。

だが普通の『人』であった恋人は同じ人から受けた攻撃によって呆気なくこの世を去った。

絶対的な力を持つ魔王であっても、ほとんど致命傷であったそれを治すことは出来なかった。

『シユザ！死ぬな！私を置いて死ぬことは許さん！』

恋人は同じ人間の非道に恨み言を言うでもなく微笑を浮かべて死んでいった。

魔王は悲しみと怒りで大陸を一つ潰し、消え行こうとする恋人の魂に徴を付けた。

いつか再びこの世に転生する恋人を見つけるために。

+++++

袖揃り合うも他生の縁。

人の振りをして街を歩いていた魔王にぶつかったのは、一頭の犬だった。

普通の犬であれば、いくら人に模しているとはいえ魔王にぶつかってくるなど無かつただろう。

だがその犬は幼い頃から人に飼いならされている小さな愛玩犬だった。

「チユリ！」

犬の名前らしきものを呼んで駆け寄って来たのは妙齡の女性だった。

貴族の外出着に身を包み、従者もその後から駆けてくる。

「お嬢様っ！」

「チユリ！チユリ！…すみません。この子が失礼を…」

犬は女性の呼びかけにくうんと鼻を鳴らして腕の中に飛び込んだ。

「名は」

「はい？」

「そなたの名は何と言う？」

「ミュリアン・デイ・クレイハザウと申します」

「お嬢様！」

素直に答えるミュリアンを庇うように従者が前に出た。

「こちらはクレイハザウ家のご息女であられる。控えられたし」

従者の言い様はこの街の住人には効果があつただろうが、生憎相手は魔王様だ。

人間の地位など魔王には何の価値も無い。

無言のまま紫眼で見下ろした魔王に、従者は戸惑いの表情を浮かべた。

「貴様に用は無い」

「…な」

「退け」

上からの物言いに、従者は絶句したが…忽ち顔を赤くして怒った。
「無礼な！こちらの方を…」

「私には何の意味も無い。この街を滅ぼされたいのならば好きにするが良い…ただ」

すつと伸びた白い腕にミュリアンはびくりと身を震わせた。

「我が名は魔の中の魔」

宣言と共に、降り注いでいたはずの日差しが暗雲に覆われた。

昼の時間が封印され、突然に訪れた夜の…魔の時。

人々の顔に驚愕が広がり…硬直が解けるや我先にその場から逃げ出した。手にしているものを投げ出し、転がった人を踏みつけ、その場から一刻も早く逃げ出そうと騒然となる。

動けずに居たのは従者とミュリアンのみだった。

どちらもその顔色は蒼白で、ミュリアンは今にも気を失いそうだった。

魔王はそんなミュリアンに近づき、顎を捉えた。

「お前。我が名を呼べるか？」

魔王の問いかけにミュリアンは小刻みに震え、口を動かすことさえ出来ない。

「記憶が無いのか？」

魔王が何を問いたいのかわからない。

そこで、ふと魔王が微笑を浮かべた。

「そなたは我が嘗ての恋人の転生体。シュザに間違いない。そのうち思い出すであろう」

魔王はミュリアンの腰に手をまわし、外套で覆い隠そうと…

「ま…待てっ！お嬢様を…っ」

従者はなけなしの勇気と義務でミュリアンを助けようと手を伸ばした。

それを魔王は冷徹に眺めると小さく呟いた。

「邪魔だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3088/>

魔輪舞曲（マロンド）

2010年10月12日03時38分発行